



Puzzle文集 3

目次

真っ白けっけ	1
いいやつら	2
4 パンクス	5
戸袋に引き込まれないように	7
くまのもりさん	8
宍戸パーフェクト・デイ	10
そのすてきなワンピースを僕にください	11
ロンサム ロンサム	14
晴天の辟易	18
疾走する男児	20
失速するおっさん	21
宍戸ストロング・イナフ	23
爆音と満月	24
覚えがない	26
冬にバナナが呼んでいる	28
ロング・アンド・ワインディング・コート	29
宍戸ポップ・スター	31
君のくれた阿呆	33
探してください	35
動物公園日和	37
奥付	
奥付	44

真っ白けっけ

三六〇度真っ白な世界。

さて、ここからどうやって再スタートを切るか。どうしたらいいものか見当もつかない。呑み会の席で迷い無くいつまでも喋り続けるおまえ。心から尊敬するよ。でも、そのスキルを求むわけではなく、本当はSF漫画で見たように、等調液に浸かってブクブク培養されていたい。好きな音楽でも聞きながらブクブク。朝から続く奥歯の違和感も気にせずブクブク。

反面、存在は示したいだろう。米国的ロマンティシズム、飛行機雲でMarry Me！なんて、他人様から祝福ありきの感動。やりすぎだろ。でも、気づかれないのは寂しいな。全く面倒な男。博物館にでも展示してもらえないだろうか。

「誰かいますか？」

俺の声がこだまする。

「俺がいますよ」

こだまに答える。

目の前には扉があって、その先には日常がある。

ここに入ったら一からスタート。俺が決めたルール。

壁も、床も、天井も、扉も、ドアノブも真っ白な世界。床は元々深緑色だったけれどペンキで塗り替えた。ついでにドアノブも白にした。残されたのはTOTOの文字くらい。ここは便所だから。

胃袋と膀胱に溜まっていたものは粗方排泄した。それでも既に吸収されてしまった豚肉やらが、未だに俺の満腹中枢を刺激している。アルコールに浸った脳味噌がタプンと音を立てる。

便器に突っ込んでいた頭を持ち上げ、俺は服を脱ぎ捨てた。

「嗚呼」

声を漏らして、便座に腰を下ろす。背筋を伸ばして両耳に両手。そのまま真っ直ぐ上に腕を伸ばし頂点でつなぐ。頭を垂らせば目の前には醜く膨らんだ腹。大きく息を吸ってさらに膨らませる。

「一輪挿しっ」

俺の声がこだまする。阿呆らしくて笑えた。自然と涙が溜まる。続いて、俺は両膝を抱え込んで丸くなる。鳩尾と太股の間に腹の肉が挟まる。

「角煮割包（カーパオ）っ」

涙が溢れた。言うておくが、笑えたせいだよ。

体が重い。等調液に浮かんでいたい。ブクブク培養されながら博物館の展示物にでもなっ
てしまいたい。誰にお願いすればいいのだろう。常設展『全く面倒な男』。

朝から続く奥歯の違和感。朝食の冷飯が未だ奥歯に詰まっているような。冷蔵庫の中で
逆行してパッサパサになった飯。そのパッサパサ具合を確認せずに納豆をかけてしまっ
たら、もうレンジには突っ込めない。熱々のご飯に納豆はいいが、熱々の納豆はいただ
けないだろう。仕方なくパッサパサになった飯を奥歯で噛み砕く。納豆の滑りと米粉の
ハーモニー。今日一日の敗北感はここに起因するのかもしれない。

奥歯の違和感、腹の異物感、脳味噌の浮遊感を押し殺し、俺はこの白い部屋を抜け出
す。ひとまず眠ろう。ごめんなさい。今夜は節電できません。キンキンに冷やした部屋
の中、布団にくるまって眠りたい。いくらか快適な睡眠がとれたなら、明日もまた行け
るだろう。何も考えず、満員電車に乗り込むことができるだろう。

いいやつら

虫は殺さない。特にカゲロウ。成虫は口が退化していると知ったのは国語の授業だっ
た。幼虫時代の罪を成虫になって贖うような潔さ。でも、意外と活発に逃げ回る。家に
飛び込んできたカゲロウを追い出すのは、まったく一苦勞だった。

平日は程良く社会と向き合い、週末は惰眠。そして、俺は佐藤からの電話で目を覚ま
した。

「なあ、今夜、暇か？」

「暇だけど」

何より暇を愛している。それなのに、「暇」＝「都合がつく」と勘違いしているヤツが
多い。

「じゃあ、『田村さ来』集合な」

「それより、いつになったらパンダ持って帰るんだよ」

「わりい、今ちょっと立て込んでっから」

ツーツーツー。空しい音が耳を打つ。

「なんなんだよ」

俺は眩いて、携帯を閉じた。

部屋の隅には、巨大なパンダのぬいぐるみがだらしなく寝そべっている。その姿に思
わず笑えた。

「おまえから電話したんだろ」

俺は、そいつに携帯電話を投げつけた。

パンダが好きな彼女のために佐藤が用意したプレゼントだった。しかし、生憎、誕生日には別な男の先約があったそうだ。そして、お楽しみの惰眠中に、馬鹿でかいパンダを抱えて男泣きするあいつが現れた。どう対処したらいいものか悩まされ、ひとまず、アパートに迎え入れたのが運の尽き。それ以来、パンダが住み着いてしまった。

ほぼ等身大のパンダだ。愛くるしい瞳、佐藤の思い出、廃棄料、なにより等身大。捨てるようにも捨てるに理由がいくらかもある。一度思い切って粗大ゴミに出したところ、その夜に牙をむいたパンダがアパートを叩き壊しにやってきた。そんな夢を見た。どうやら俺の一番の懸念は、そんなSFじみた恐怖のようだった。

『田村さ来』にパンダを持って行ってやろうか。

集合だなんて言っても、沙希とあいつしかいないのだ。金がないのに酒が呑みたくなると、俺たちは小銭を持って沙希の家に押し掛けた。彼女は一皿五〇円程度の料理を拵えて一〇〇円で提供する。甲類焼酎のペットボトルをキープしているから、五〇〇円もあれば十分に呑み喰いできるのだ。俺たちは沙希のアパートを某大衆居酒屋に因んで『田村さ来』と呼んでいる。

安酒が呑める以外にも、定期的に『田村さ来』へ足を運ぶには理由があった。それは、引きこもりがちな沙希の様子を見に行くためだ。

「あいつ顔がいいからな。もっと幸せになってもいいと思うんだ」

その発言はどうかと思うが。

「じゃあ、おまえが付き合えよ」

「あいつ暗いからなあ」

佐藤は思ったことを口にしないと気が済まない質だ。

俺たちは沙希を通じて知り合った仲だった。あの頃、俺は新商品アンケートを勧誘するアルバイトをしていた。

「缶コーヒーを飲んで、簡単なアンケートにお答え頂だけで、商品券を差し上げています」

俺が懸命に誘い込んでいる間、沙希は終始困った表情でそれを拒んでいた。そして、彼女が逃げるように駆け出したところ、「パンダ」にぶつかった。正確に言えば、「パンダのキャラクターが描かれたTシャツを着た佐藤」にぶつかった。

「痛いっ」

沙希はその場でしゃがみ込んだ。佐藤は何を思ったのか、俺に睨みつけてから彼女に手を差し伸べた。途端、佐藤は表情を変えた。

「田村沙希っ!?!」

二人は中学校の一年間を同じクラスを過ごした間柄だった。特に親しい仲ではなかったが、佐藤は覚えていた。やはり、当時から「顔はいいけれど暗い女」だったからだろう。手を取ろうとしない沙希の腕を掴んで、佐藤は彼女を引っぱり上げた。

彼女はさらに困惑した様子で目を泳がせる。半分は佐藤のせいだろうに、あいつは再び俺に睨みを利かせた。

「あんた、田村沙希に何したのよ？」

想定外の展開に困惑したあげく、俺の口から型通りの台詞がこぼれた。

「缶コーヒーを飲んで、簡単なアンケートにお答え頂だけで、商品券を差し上げていま

す」

佐藤はヒトを小馬鹿にしたような表情を浮かべた。

「はぁ？」

それは希に見る腹立たしいもので、俺は柄にもなく語気をあげた。

「アンケートに答えるだけで三〇〇〇円も貰えるんだよ。俺も以前こんな風に捕まったんだけどね。でも、本当に簡単なことで三〇〇〇円が貰えたんだよ。それってとてもいいことだろ。そんな顔すんなよ。こっちは胸張って勧誘してんだよ」

佐藤は俺の勢いの気圧され苦笑い。沙希の目なんかもうバタフライ。そして、あいつは溜息一つついてから、思わぬことを言い出した。

「分かったよ。じゃあ、俺がそのアンケートに答えりゃいいよな」

途端、俺は阿呆みたいに畏まる。

「ありがとう、ございます」

小さく頭を下げ、佐藤をビルの一室へ案内した。

そして、あいつは缶コーヒーを飲んで、簡単なアンケートに答えるだけで、商品券を受け取ったのだ。

会場から出てきた佐藤はご機嫌だった。

「本当に三〇〇〇円もらえたな」

「だからそう言ったじゃないですか」

エレベーターを降りて、ビルの外まで佐藤を見送ると、そこには沙希がいた。もう落ち着いた様子で、真っ直ぐにこちらを見ている。そして、俺たちを見つめるなり頭を下げた。

「ごめんなさい」

なんで謝るのだろう。そんな疑問よりも先に、きれいな子だな。そう思った。

『田村さ来』に集まると、よくその日のことを思い返す。

「沙希は、なんであの時いきなり謝ったんだ？」

「なんだか、二人ともいいヒトだったから」

沙希にそう言われると、とても気分がいい。そして、俺たちはついついいいヤツになってしまう。

「その後の佐藤の発言もよかったよな」

「なんて言ったっけ？」

とても良かったと俺は思うんだ。

「この出会いを大事にしたいなってきたぞ」

その一言で俺たちの付き合いがはじまったのだから。

結局、等身大パンダはアパートに置いてきた。

あのパンダは、きっと、俺の家にある方が都合いいのだ。

4 パンクス

俺たちは黙り込んで缶コーヒーを啜る。彼奴は俺たちを呼び出しておいて一体どれだけ待たせるのだ。誰がリーダーと言うこともないが、アガリがいないとどうもまとまりがない。というより、間が持たない。

「おい、彼奴はいつになったら来るんだよ」

ビッグスクーターに跨がったサルが俺に視線をぶつける。アガリが何かやらかすと、一番付き合いの長い俺に矛先が向けられる。そのため、俺も何となくナンバー2を気取っているが、彼奴のように気の利いた話題を持ち出すことができない。壁にもたれたマンボウが、文庫本から顔を上げて妙なことを言いだした。

「アガリが来ないのは俺のせいかもしれないよ」

「何かしたのかよ」

サルは眉間に皺を寄せて、マンボウへ首を捻る。

「昨日、アガリから電話があったんだけど、俺、出なかったんだよね。留守電に集合の連絡が入っていたのは分かってたんだけど、面倒くさくなっちゃって折り返さなかったし」

「なんだよ。おまえには電話があったのか。俺にはメールだけだぜ」

サルに電話すると長くなるからな。俺は内心呟いた。彼奴を庇うつもりはないが、マンボウの言うことのも納得いかないね。俺の知る限り彼奴はそんな小さなことに拘る男ではない。

俺は一週間も前から今日のことを聞かされていた。その日は、やはりこの男四人でミナトミライへ繰り出していた。ジェットコースターがゆっくりと登り詰める間、俺の隣でアガリは言った。

「来週、またみんなで集まろう」

アガリはいつもの通り、一点の曇りも無い微笑みを浮かべていた。

「誰も欠けちゃなんないよ。この四人がいいんだ」

コースターが降下をはじめ、空に溶けるようなアガリの声は、途端、猟奇じみた絶叫へ変わった。

「アガリは来るよ」

俺は確信を持って言った。

「そりゃ、彼奴のことだから来るだろうけどよ。でも、どんだけ待ちやいいんだよ」

サルが不満そうに缶コーヒーを啜りあげる。

それから、またしばらくの沈黙が続いた。秋風が落ち葉を鳴らす。俺は空っぽになったコーヒー缶に口を付ける。こんな時、タバコを吸う奴は便利だと思う。さり気なく立

ち上がって、みんなと少し距離を置いたところで火を付ければいい。でも、俺はタバコはやらない。考えてみれば、アガリ以外に誰も吸わない。

マンボウは再び文庫本に目を落とし、時折、腹の肉を摘んでは引っ張る。サルはイライラした様子で、両膝をドラムに見立ててリズムを刻む。彼奴が音楽をやっているなんてことは聞いたことがないけれど、俺は耳にイヤホンを突っ込んで、メランコリーなナンバーにでも浸っていたいところだが、みんなで過ごす時間に耳を塞ぐことは阻まれる。

マンボウの文庫本はどうなのよ。でも、彼奴はそんなキャラクターとして認知されているから、色々なことが許される。何が悪いでもないのだが、彼奴は何か許されているような気がする。何をしても、何もしなくても、何を言っても、何も言わなくても。

サルだってそうだ。彼奴は気の短い男としてキャラクターが成り立っている。シートから飛び降りた彼奴は、飲み干したコーヒー缶を足下に立てて、勢いよく踏みつぶす。うまく潰れず、舌打ちを一つ。そして、空き缶を空へ蹴り上げた。

俺はどうだ？

自意識過剰で、気が弱くて、ナンバー2を気取っている。そんなキャラクターとして認知されているのだろうか。そんなことなら認知されなくて結構だ。理解しがたい奴で構わない。それでも、きっと俺がみんなを理解している程度に、みんなは俺を理解しているのだろう。

理解した上で認め合う。なんだ、お互い様じゃないか。

携帯電話が震えた。フリップを開けばアガリのメールだ。

お台場には、自由の女神がいるらしい。

「アガリか？」

携帯電話に向かって肩を聳める俺に、サルが尋ねた。俺はうなずく。

「なんだって？」

マンボウが問いかけに、俺はメールを読み上げる。

「そんなこたねえだろ」

サルが即座に否定し、マンボウは「へえ」と口を尖らせる。

わりと有名な話だと思うのだが、水を差すようなことを言わないでおく。

「なんで、お台場にそんなもんがあるんだよ？」

なんでと言われても知るわけがない。続いて、マンボウは自由の女神がなんたるかを語り始める。

「そもそも自由の女神ってのはさ、一八八六年にアメリカ独立一〇〇年を記念してフランスから送られたものなんだよな」

だからお台場にあるはずがない。そう言いたいわけでもなさそうだ。単に蘊蓄を披露したかったのだろう。

「お台場は日本からの独立を企んでいるわけか」

サルは顎に手を添えて阿呆なことを言う。

やがて、聞き慣れたマフラー音が近づいてきた。

「悪い悪い、ちょっとガススタで女神様話しに盛り上がっちゃてな」

アガリは大して悪がる様子もなく、目の前にバイクを横付けする。俺が後ろに跨がる

と、サルの後ろにマンボウが跨がる。

アガリとサルのマフラーが互い違いに唸る。行き先はお台場。アガリの本来の目的は何だったのか。あえて尋ねるつもりはない。少なくとも女神様より大したことではない訳だ。

「行こか」

アガリが振り返る。それは、いつもの通り、一点の曇りも無い微笑みだった。

戸袋に引き込まれないように

小さな息子を抱えて列車の扉にもたれる。行き先は決めていない。あいつが電車に乗りたいとせがむから、何も考えずに乗り込んだのだ。この休日は何処だってあいつが行きたいことに連れて行ってやろうと決めていた。先週、無理矢理携帯ショップに付き合わせた挙げ句、嫌がるあいつの坊主頭をひっぱたいてしまったから。

息子は窓の外を眺めながら、時折、行き過ぎる対向列車に歓声を上げる。俺は機種変更したばかりの携帯電話をいじりながら肩間にしわを寄せる。

隣駅に到着すると勢いよくドアが開き、寄りかかっていた身体を慌てて起こした。ドアは戸袋へ収まる。すると、息子は小さな指でそいつを摘み出そうとした。完全に開ききったドアだから引き込まれることは無かろうが、戸袋に指を差し込む行為には不安を感じる。やがて発車のベルが鳴り、俺は身体を捻って小さな手を戸袋から引き離れた。

再び列車が走り出すと、たくさんの車両が集まる操作場に差し掛かった。息子は興奮のあまり全身をバタバタさせながら「電車、電車」と騒ぎ出す。俺はあいつを落としそうになり、両腕に力を込めた。小さな両手は無尽蔵に振り回され、俺の頭をひっぱたき、新品の携帯電話を叩き落とした。

「のあ！」

思わず大きな声が漏れ、顔を隠すようにその場のしゃがみ込む。いったん息子を下ろして携帯電話を拾い上げると、何故下ろすのだ？ 電車が見えないではないか。と、悲嘆の表情で訴えた。思わず手が伸び、坊主頭に一発。そして、ため息をもらして再び息子を抱え上げた。

対向列車が走れば、拳骨のことなどすぐに忘れて声を上げる。列車が通り過ぎると車窓から操作場は消えていた。俺は携帯電話に傷が付いていないかどうかを確かめ、我ながら小さい男だと自己嫌悪する。

「ごめんな」

一言呟いて坊主頭をなでると、無垢な瞳が俺を射した。何故撫でてくれた？ と、尋ね

ているようだ。寛大というか、間が抜けているというか。

あまりに寛大な男が間抜けと紙一重に思えることがある。そんな男に憧れもする。表面的には大らかなようでいて必死に己を殺す。結局、押さえきれずに愛すべき坊主頭をひっぱたく。昔からそんな風にして生きてきたように思うのだ。

坊主頭をもう一度撫でる。あいつは車窓に食い込んだまま、期待した間抜け面は返ってこなかった。

次の駅に到着すると、息子はまた戸袋のドアを引っ張り出そうとした。俺は好きにさせてやれと、黙ってその指先を眺めた。すると、優先席から老婦人がヒラヒラと手を振りながら声を上げた。

「ほらほら、危ないよ」

ドアが閉まると同時に俺は身体を捻り、戸袋から小さな指を引き出した。あいつは不満げな声を上げ、再び列車は走り出した。

戸袋に突っ込まれた指は真っ黒だ。

「あああ」

俺はその指をあいつのTシャツの裾で拭い、優先席へ小さく頭を下げた。顔を上げれば同じ顔した老人が並んでいる。ギョツとした。老婦人、老紳士が皆一様に優しい笑みを浮かべながらこちらを見つめているのだ。寛大で間の抜けたような顔。それはまるで俺が求める末の姿だった。思わず息子を抱き寄せた。いつまでも優しい気持ちでいられるように、あいつを強く抱きしめた。

くまのもりさん

ある日 森の中 熊さんに 出会った♪

昭和から時が止まったような百貨店。俺はその屋上遊園地でBGMにあわせてキュートに振る舞う。演劇サークルの先輩の勧めではじめた熊のバイトは、大学を辞めてからも続け、気付けば15年が経つ。

華やかなキャンパスライフへの期待も束の間、どうにも性に合わず墮落した。先輩を恨んではない。熊として生きることに灰かな喜びを感じている。

絶えず笑顔浮かべる熊の中には、うまく笑えない俺がいる。それでも、少女は俺に笑顔をくれる。白い貝殻の小さなイヤリング♪

子供相手の商売だから、仕事は一七時きっかりに終了する。

「森さん、いつもお世話様。ありがとね」

屋上遊園地の園長は目尻にしわを浮かべて俺をねぎらう。彼女とのつきあいも一五年

になる。どことなく母の面影がある彼女のくたびれた笑顔を見ると、涙があふれそうになる。

お世話様です。

それは、タクシーを降りる時に母が決まって使う言葉だった。

「御世話様」は、広辞苑にも載っている。自分のために尽力してくれた人に、ねぎらいや感謝の意を表して言う語である。幼い時分、母をまねて口にしていたが、青い時分、それは古くさくて恥ずかしい言葉だった。今では、母のイメージと重なって美しい言葉として記憶されているが、とても口にするができない。

俺は礼儀として熊の頭を脱ぎ、不格好な笑みを浮かべて小さく頭を下げた。

「また明日」

そう言い続け一五年、毎日、俺は律儀にここへやってくる。

繰り返される日々の中、ある日、心境の変化が訪れた。きっかけは熊が新調されたことだった。

「記念にこれもらって帰るかい？」

園長は目尻にしわを浮かべて笑んだ。そんなことを言われるとは思ってもいなかったが、考えてみれば人生の三分の一以上をともにした俺の分身だ。その無機質な笑顔と目が合うと、処分されるのを見過ごすわけにもいかない。

「もらって帰ります」

俺にしては珍しく強い意思表示だった。園長に笑顔があふれた。そして、俺は熊をゴミ袋に突っ込んで自転車の荷台に乗せると、そいつを片手で押さえながら走って帰った。

ひょっとしたら園長は俺の貧窮した生活を知っていて、暖をとるために熊を持たせたのかもしれない。もしくは、単に粗大ゴミのコストを気にしただけか。いずれにしろ、すっかり俺の臭いが染み着いたその熊は、冷える夜に心地よかった。

ある夜、無性にタバコが欲しくなって自販機へ向かうことにした。いつもなら熊を脱いで出かけるところだが、着たまま行ったらどうだろうと思い立つ。この辺なら深夜にそれほど人通りはない。なにより、この格好は暖かく心地よかった。

もちろん頭は被らず出かけた。途中、何人かとすれ違ったが、さほど気にかける様子もなかった。頭を被って出かけても平気だったかもしれない。

日中はいつものように屋上遊園地でキュートに振る舞う。内心、新調された熊は馴染みが悪く、新品特有の臭いとともに不愉快だった。そして、少女がいない。いつも遠目に微笑みながら俺を眺めるお嬢さんがいないのだ。辺りを見回せば、誰も俺を気にかけていないこと気付く。不意に不安を覚えた。

アパートに帰ればすぐに俺の熊に着替えた。テレビをつけて缶ビールを呷る。もう随分ベテランの域に達した芸人が、半裸で氷水に突き落とされた。ちっとも気が紛れずテレビを消す。そして、熊の頭に手を伸ばした。そいつを被って姿見に映せば、いつもの笑顔。俺は両脇を締めてキュートに両手を振る。馴染んだ肌触りと臭いに安心感を覚えた。そのまま横になって時を待つ。

今夜、本来の姿で真夜中を彷徨しよう。

お嬢さんお待ちなさい♪

そんな一節を口にすると、張り付いた笑顔の中でいくらか笑えた。

宍戸パーフェクト・デイ

宍戸は拳を突き上げて大声で叫んだ。

そして、ギターを振り回して大の字に倒れ込む。随分と派手なパフォーマンスの後、音が止んでまばらな拍手が響く。そして、終演。俺はステージから退場する度、首筋に嫌な汗をかいた。

そんなあいつも今では随分落ち着いた。歳をとったせいだろうか。二浪して三流大学卒とはいえ、俺とそう違うのだから。

昔話を思い出したのは、定例の呑み会で宍戸が妙な話をはじめたからだ。

「いきなり小学生くらいの女の子にボールぶつけられたよ」

宍戸はカウンターに突っ伏したまま、好物の牛すじ煮込みにも箸が進まない。

「随分落ち込んでるな」

「その後だよ。なんて言われたと思う？」

俺は首を傾げる。

「ガラクタ」

酒の勢いに任せて、俺は遠慮のない笑い声を響かせた。

「ガラクタだぞ」

宍戸は顔をしかめて繰り返す。恵比寿顔の店長も笑いをこらえきれなかったようで、背中を向けて肩を震わせた。

「見た目は可愛い女の子だったからな。油断したよ。俺が絶句してる間に笑って逃げていきやがった。悪気はないのだろうが、なきやいっててもんでもないだろう」

小鉢に箸を突き立てて、宍戸は続けた。

「大声で怒鳴りつけてやればよかったよ」

最近、宍戸の大声を聞いていない。なかなかそんなシチュエーションはないが、昔はそうでもなかった。昼間のキャンパス。夜の商店街。早朝のプラットホーム。あいつはステージに限らず、どこだって拳を突き上げて大声で叫んだ。何に対してそんなに声を枯らす必要があったのか。

時折、その叫びは俺にも向けられた。

「引いてんじゃねえよ。もっと来いよ」

ライブの打ち上げで呑めもしない酒を舐めると、本音がこぼれた。俺たち（正確には、ドラムを叩く気のいい後輩を除いた俺と宍戸）は、決して優れたプレイヤーではなかつ

た。穴戸のパフォーマンスと雄叫びで煙に巻いていたことは否めない。歌詞を間違えればポゴダンス。誰にも気付かれないムーンウォーク。それでも飽きたらず、ギターを放棄して、できもしないコサックダンス。もはや駄々をこねた餓鬼にしか見えない。そんなもんを俺に求められても困る。あれは穴戸だから赦されるのだ。語如語如言い返しているうち、あいつは眠りに落ちた。

よっぽど「ガラクタ」に傷ついたのか、あいつは俺のジョッキを引き寄せて琥珀色の液体を見つめた。

「心から完璧だと思える一日があったら、死んでもいいな」

突然、何を言う。

「ご長寿世界一が夢だったんじゃないのか？」

「死んでもいいくらい完璧だったら死んでもいいだろ」

「そりゃ、おまえの夢が叶った時じゃないのか？」

「世界一の年寄りになった日か」

「だな」

「そりゃ、死んでもいいわな」

穴戸の目尻にしわが刻まれる。やっぱ老けたな。

あいつは以前こんなことを俺に語った。

誰よりも年寄りになって、皺だらけの気色悪い顔で笑ってやる。長生き以外に取り柄のない男が、世界中を見下ろして言うんだ。

「儂が全部許してやろう」

皺だらけの穴戸が拳を突き上げて大声で叫ぶ。俺はそんな姿を想像した。

そして、杖でも振り回して大の字に倒れ込む。随分と派手なパフォーマンスの後、まばらな拍手が響く。そして、終焉。

不意に、少女の「ガラクタ」発言を思い返して鼻が鳴る。身も蓋もない。

穴戸は俺のジョッキを持ち上げてビールを呷った。

「あ」

俺と店長の声が重なる。ため息をついて目を合わせると、変わらぬ恵比寿顔が小さく頷いた。

そのすてきなワンピースを僕にください

ワンピースをください。もし、よろしければ、そのすてきなワンピースを僕にください。

暖かな日差しに包まれた川辺。君は日傘のようにぐるりと一回転。きっと、君が見ている世界は、僕が見ているものより何倍も鮮やかなんだろうね。

大切なヒトにそのワンピースをプレゼントしたいな。そんな風に思ったら、なんて声をかけたらいだろう。

「そのすてきなワンピースを僕にください」

案の定、君は怪訝な顔をした。でも、すてきなワンピースを着ていた君のせいでしょう。

「ワンピースなんてどうするの？」

僕が着るとでも思ったんだろう。いきなりそんなことを言われたら、きっと誰だっそう思うよ。僕は慌てて首を振った。君は首を傾げた。

「そのすてきなワンピースを着せてあげたいヒトがいるんだよ」

君が言うには、そのワンピースは自分で仕立てたものなんだって。だから、二つと同じものはないんだって。そんなことを言われたら、ますます欲しくなっちゃうじゃない。

「今日、誕生日なんだよ」

「じゃあ、ますますダメね。同じものを作ってあげる時間もないじゃない」

「そうでもないよ」

「そうなの？」

「今日、生まれるんだから」

君は目を丸くして、それから両膝に手をついてまっすぐに僕を見た。

「お兄ちゃんになるんだ」

「きっとかわいい女の子だよ」

「ワンピースか。一歳の誕生日には着られるかしら」

「一年後か。随分と先だね」

「あっという間よ」

「なんでそう思う？」

君は曖昧に微笑んだ。割といい加減だね。今日はそのワンピースをよく見させてもらうよ。そして、すてきなワンピースの物語を聞かせてあげるんだ。

あっという間に二〇年が過ぎた。俺はあの日のことを思い出しながら川辺に足を運ぶ。西日の照り返す川面に目を細めながら君を思い返す。まだ俺はガキだったから、一年後と言っておけば、すぐに忘れると思ったのだろう。まったくその通りだった。一年後にどうやってワンピースを受け取るつもりだったのか。そんな約束すらしなかった。ロマンチックで詰めのあまいガキだった。

しかし、結果的にそれでよかったのだ。予定日から一日遅れで生まれたのは可愛くもない野郎だったのだから。

一〇歳下の弟だ。勿論はじめのうちは可愛かったよ。でも、ある日、一〇年の間君臨していた王座が奪われていることに気がついた。指をくわえて見ていれば、あいつはすくすく生意気なガキに育っていった。

「よう」

俺は無愛想に手を挙げる。

目の前には、間もなく二〇歳を迎える、可愛くもない弟がいる。

「元気い？」

あいつは屈託ない笑顔を浮かべた。容姿端麗。おふくろが憧れるほど白い肌が橙色に染まる。どうしたらいつまで経ってもそんな笑顔でいられるのか。まったく不思議でならない。

「一〇代最後の日を兄貴と過ごすことになるとはな」

俺を兄貴だなんて呼んでいたろうか。

「二〇歳の誕生日よりは都合がつくだろう」

「明日だって暇だよ」

変に気を使われた気がして俺は苦笑いを浮かべた。こっちだっておまえが来るとは思わなかったよ。不意に二〇年前のことを思い出してメールをしたのだ。でも、来るよな。俺だって弟に呼び出されたら何事かと気を揉むに違いない。

「突然、悪かったな。大学は楽しんでるか？」

すると、不意に子供じみた笑みを浮かべた。

「興味ないくせに」

「んなこたねえよ」

俺は狼狽気味に声を荒らげる。

「二〇年前、ここでさあ」勢いに任せて言いかけた言葉をすぐに飲んだ。「おまえ、今日産まれる予定だったんだよ」

「それ、聞いたことあるな。女の子の予定だったんだろ」

「よく知ってるな。見えるべきもんが隠れてたんだってよ。男の子を女の子と間違えることは割とあるらしいな」

「で、ここで何？」

俺は口元を歪めた。いざ口にしてみようと思っても、三〇過ぎのオッサンが野郎に向かってすてきに語れるような話ではない。あいつは真っ直ぐな視線で俺の言葉を待っている。何よりあいつを可愛がるおふくろの気持ちが分からないでもない。

「要するに、たまにはおふくろに顔を見せてやんなって話しだ」

「なんだそりゃ？」

実際、弟を家に連れて帰ることも大きな目的だった。

「おまえ妙に薄情なところあるよな。こっちから連絡しないと、家出たっきりじゃねえか」

「なんだよ。説教かよ」

弟はむくれて眉をひそめた。

「兄貴の特権だ」

俺も歳をとったのか。

また、あいつが可愛いやつに思えることがある。

ちょっとだけ。

ちょっとだけだよ。

ロンサム ロンサム

「名前は知らんが、顔が出て来んな」

ハンドルを握りながらオッサンは呟いた。何を悩んでいるのか。何も分からないじゃないか。

「でも、郵便番号は分かります」

俺はおどけて言う。

「おまえ何言ってんだ？」

オッサンは自分の間違いに気付いていないようだった。盲目の天才バイオリニストが板に付いてきたせいか、随分と耳が鋭敏になっていた。それにしれも、オッサンはよく言い間違をした。

俺たちは街道沿いに軽ワゴンを走らせ、一儲けした金でちょっとした中華料理屋に入った。円卓に並ぶ料理を前にオッサンは随分と機嫌がいい。

「おい、このウケッコウのスープはうまいぞ」

「ウコッケイ」

すかさず訂正すれば、オッサンは人目を憚ることなく大口を開けて笑う。

「結構！ 結構！」

俺は満面の苦笑い。ただでさえ機嫌が悪かったところに追い打ちだ。

「箸が進んでないじゃないか」

「俺は天津飯が食いたいと言った」

なんでも食わせると言っておいて、テーブルがグルグル回るややこしい中華料理屋に入るのが間違っているのだ。

「あんなオムライスを雑炊にしたようなものの何がうまい？」

オッサンが思い浮かべているのは、関東風のケチャップあん仕立ての天津飯だろう。あんな品の悪いものだったら俺だって望んじやない。透き通る出汁あんがかかった、あの芸術的な天津飯ならいくらだって食えるだろう。

「中華丼のほうが栄養があるぞ。お前みたいに怒りっぽい奴はミネラルが足りんのだよ。雑炊オムライスなんぞ餓鬼の食いもんだ」

餓鬼を捕まえて餓鬼と言うな。俺は言い返す気力もなくウズラの卵を口の中で転がした。

俺とオッサンの出会いは、ちょっと変わったものだった。

一月ほど前のことだ。俺は地元の音楽家の名前を冠にしたコンクールで金賞を受賞し、バイオリンの神童と賞賛された。好きこそ物の上手なれと言うが、好きでもないのに受賞したのだから、ある意味では評価されてもいいだろう。競争意識だけで勝ち取った金

賞。そんな奴が高みを望んだところで先が見えている。俺は見切りをつけて町を出た。それでも、バイオリンは持って行くことにした。旅をする上で金になると考えたからだ。

はじめて親に無断で列車に乗り込んだ。最初はまわりの視線を気にして、しばらく車内に背を向けてドアにびったりくっついてた。しかし、所詮は自意識過剰なローカルヒーローだ。誰も俺の存在を気にする様子はなかった。途端に恥ずかしくなり適当な駅で列車を降りた。

その日の身銭を得るため、俺は駅前でバイオリンケースを広げてた。そして、百円玉を三枚転がして演奏をはじめた。一度、こういうことをやってみたかったのだ。手始めに少しピッチを上げたG線上のARIA。すぐに通行人は足を止め、俺の演奏に耳を傾けた。たまに百円玉投げ込むヒトもいた。とても気分が良かったけれど、長くは続かなかった。

人垣が消えたかと思えば、目の前に婦人警官が立っていた。
「ご両親は？」「おうちは？」「学校は？」

いきなりの質問の嵐にウンザリすると、大きな声で名前を呼ぶ声がした。
「おい、カツヲ！」

俺はそんな名前ではない。にもかかわらず、眉間に皺を寄せたオッサンが勢いよく歩み寄り、いきなり俺の頭をひっぱたいた。続いて、頭を鷲掴みにして何度も上下させながら「スンマセン、スンマセン」と連呼する。最後にもう一発頭をひっぱたいた。

突然の出来事に啞然とするうちに、婦人警官は去っていった。そして、オッサンは俺の顔をのぞき込む。

「おまえ、カツヲじゃないよな」

「なんなんだよ」

「俺は警官になろうなどという女がもっとも好かんのだ」

そして、オッサンは急に黙り込んで顎を撫でた。

「おまえ見たことあるな」

俺は慌てて目をそらす。すると、オッサンは胸に挿していたサングラスを差し出した。俺は何のことやらよく分からず、オッサンを見上げた。

「気にすんな。万引きしたサングラスだ」

そのどうにもだらしない風貌は新鮮だった。俺はサングラスを受け取り、自分にはじめて覆面をした。オッサンが笑いかける。

「おい神童、おまえは今日から盲目のバイオリニストだ」

それから俺とオッサンの付き合いははじまり、天津飯のない中華料理屋に至る。

俺はウズラの卵を噛み砕いて、食いたくもない中華丼をかき込んだ。でも、演奏後の空きっ腹にはなんでも旨かった。オッサンは満足げに頷いた。

「見てんなよ。食いにくだろ」

「中華丼のほうが旨いだろ」

俺はいい加減に首を振る。

「で、誰を探してんのよ？」

オッサンは眉を持ち上げた。

「さっき、顔が分かんないとか、名前が分かんないとか言ってたろ」

「そんなこと言ったか？」

俺は噛みきれないイカを飲み込みながら頷いた。

「自分探しかな」

「殴っていいか？」

「怖い怖い」

オッサンはそう言ったきり、かかってくることのない携帯電話と向き合った。

「さっさと食いな。今日の移動は長いぞ」

俺たちは、食事を済ませてワゴンに乗り込んだ。助手席にはシートベルトをしめたジャンベが置かれている。その特等席には誰も座ることはなく、俺は決まって後部座席だった。

明日は海辺の老人ホームでの演奏が決まっていた。老人ホームの仕事は初めてではない。俺たちの噂が広まってきたのか、連日の演奏ははじめてだ。

「老人ホームに顔があるといいぞ。近い将来、きっと保育園なんて比じゃないくらい倍率が高くなる」

「まだ老人ホームって歳でもないでしょう？」

個人に関する問いかけには、決まって返事がなかった。

まずは海へ向かう。そこから真っ直ぐ北上すれば目的地だ。海に出るまで三時間。そこで一度ワゴンを止めた。オッサンはジャンベを抱えて運転席を下りる。俺はバイオリンを握って後に続く。適当な岩を見つけて腰掛けると、ジャンベを足で抱えてアフリカンビートを刻みはじめた。そこで、俺は知る限りのクラシックナンバーを重ねた。

季節はずれの砂浜には、板を抱えてウェットスーツに身を包んだ青年が多数いた。遠巻きに俺たちを眺めては波を待つ。気にせず演奏を続けると、やがて海は夕焼けに染まってゆく。砂浜から人影が消えると、まるで自分たちが地球を回しているような錯覚に陥る。日が暮れば、ワゴンの中でたっぷりと眠った。

振動に目を覚ますと、ワゴンは光の中を走っていた。俺は体を起こして酷い空腹を手のひらで慰める。すると、運転席からメロンパンが飛んできた。

「寝過ぎたな。このまま突っ走るぞ」

そして、開演三〇分前に到着。俺は商売道具のサングラスをかけて、オッサンの袖を掴みながら、フラフラとエントランスを潜り抜ける。バレやしないかと、いつだって緊張する場面だ。不自然に首を傾けて、歩幅は小さく、俺の演技は日に日に磨かれていく。老人ホームのスタッフに笑顔で迎えられると、オッサンは決まって妙な注文をした。

「演奏前にシャワーをお借りします」

笑顔は怪訝な表情に一変する。

演奏前にシャワーのジnkス。なんてモンじゃない。風呂代をケチりたいだけだ。もしかしたら、盲目のふりをする俺に注目が集まりすぎないための演出だったりもするかもしれない。

演奏がはじまると怪訝な表情は直ぐに消える。俺たちには確かな音楽があった。オッサン

が刻むリズムに海岸の夕焼けを思い返ししながら、四本のガット弦の上で弓を弾ませる。サングラス越しに爺さん婆さんの熱い視線が突き刺さった。

演奏会が終わると、無理を言って現金で報酬を受け取った。去り際にまた怪訝な顔が並ぶ。礼なんかいらぬ。身銭を手に入れたら、さっさとワゴンに乗ってその場を離れるだけだ。

「生涯に一度の出会いを大切にしろ。惜しまれながら去っていくなんて、そんな迷惑なことないぞ。一期一会だよ」

オッサンは言った。なんか違う気もするが、そんなことより腹が減った。

「なに食いたい？」

「なんでもいいよ」

「中華丼？」

「以外」

「オムライス？」

「以外」

結局、俺たちは中華料理が食えるファミリーレストランに入った。こういうところでもいいんだよ。そして、念願の天津飯にたどり着く。化学調味料をふんだんに使った餡色のおあんが輝く。こういうのでいいんだよ。

「ここのコイホーローうまいな」

オッサンはをそう言いながら、回鍋肉を大盛りご飯に豪快に盛りつける。

「朝からメロンパン一個だけだったからな。腹減ったろ」

俺は頷いて、無言で天津飯をかき込んだ。

「育ち盛りにこんなじゃいかんよな」

オッサンはどうしても中華丼を食わせたいらしい。野菜と海産物を食っていればいいと思っているのだろう。

「次の仕事は？」

仕事の話なのに返事がなかった。

「また老人ホームか？」

「そうだな」

嘘だ。妙な空気に包まれ、レンゲが皿を打つ音だけがリズムカルに響いた。

食事を終えてワゴンに乗り込むと、オッサンは運転席から振り返り、突然、携帯電話のシャッター音を鳴らせた。

「写真？」

「ああ、忘れないようにな」

俺は薄々気づいていた。

その夜、走り続けるワゴンの中でいつまで経っても寝つけなかった。

でも、気付いたら朝だった。こんな時って、思った以上に眠れていたりする。それでも寝ていないと思ってる俺は身体は、起こそうにも酷く重たかった。

ワゴンが停車し、オッサンが運転席を降りる。小便にでも行くのかと思えば、後部座席のドアがスライドされた。

「ゴールだ」

よりによって、そこは俺がつまらない賞を取ったコンサートホールだった。

「さあ、帰りな」

俺は体を起こして、背筋を反らせた。
「なんだよそれ。結局、餓鬼扱いかよ」
極力平然を装う。
「俺の都合だよ。いつまでもこんなことが続けられる訳ないだろう」
オッサンはコンサートホールに振り返った。
「俺な、ここでおまえの演奏を聴いたんだよ」
「だろうね。じゃなきゃ、あの時に俺が誰かなんて分からないだろう」
「賢いね」
「ついでにもう一つ教えてやるよ。あんた、こんなことするの俺がはじめてじゃないね」

オッサンは俺に向き直って目を丸くした。
「名前は知らないけど、顔が思い出せないって、前のヤツのことだろう。今度は忘れないように、俺の写真を撮ったわけだ」
オッサンは泣きそうな笑顔を浮かべて「賢いね」と繰り返した。
俺は奥歯を噛みしめながら震える声を絞り出す。
「一期一会だろ」

そう言って、後部座席から飛び降りた。手のひらを上に向けて差し出せば、オッサンは黙って携帯電話をのせた。俺はそれを握り、躊躇うことなく地面に叩きつけた。そして、粉々になるまで何度も何度も踏みつけた。

晴天の辟易

太陽のバカやろう。
声を大にして叫びたい。かろうじて残照があたりを案内する日暮れ時、何でおまえは夜になると隠れてしまうのだと憤る。夜は嫌いなんだよ。臆病で陰気臭い俺がますます際立つ。地球が回っているんでしょう。そんなこと分かっとるわい。地球のバカ野郎とはなかなか言えんだろう。
阿呆なことを考えながら、夕暮れには人通りの少ない遊歩道を抜けていく。植木がガサガサと音を立て、一匹の餓鬼を吐き出した。不意をつかれて俺はのけぞる。
「冒険中だよ」
餓鬼は俺に微笑みかけた。いかにも大人ウケの良さそうな言葉を選びやがって。興が醒めるばかりだ。満面の笑みで餓鬼は駆けてゆく。俺は鼻を鳴らしてその背中に手を振った。

抹茶オレが飲みたい

同棲中の女からメールが入った。なにが抹茶オレだ。烏龍茶の出廻らしみたいな顔しやがって。駅前の茶店で買ってこいと言いたいのだろうが、俺はもう既に駅から随分と歩いてきたところだ。引き返すこともできるが、そこまでの義理はないだろう。

しかし、俺は茶店まで引き返していた。抹茶オレはもともと俺の好物なのだ。女が余計な注文をするからこっち飲みたくなってしまった。

随分とかわいらしい店員が丁寧に袋詰めする姿に見惚れていると、不意に顔を上げて俺に笑いかける。

「手提げ袋はご入り用ですか？」

「ご入り用、ないです」

彼女は「ありがとうございます」と、紙袋を差し出した。

俺は、抹茶オレが二つ入った紙袋を摘み上げながら店を後にした。ご入り用ないです。なんだよそれ。ご入り用ないです。なんだよ俺。ご入り用ないです。外人かよ。たかが小娘一人に翻弄される己が忌々しい。続いて、怒りの矛先を同棲中の女に向ける。そもそも、おまえが抹茶オレを飲みたいなどと吐かずからこんなことになるのだ。わざわざ引き返して買いに行ってやったことをネチネチ言ってやろう。足を引きずりながら玄関にドアを叩き、ゼエゼエ息を切らせながら紙袋を突き出してやろう。

「残業帰りにもかかわらず駅前まで戻って買ってきてやったぞ」

しかし、袋の中にはしっかり自分の分まで入っている。まるで説得力がない。

阿呆なことを考えながら、すっかり日の暮れたまるで人通りのない遊歩道を抜けていく。またしても植木がガサガサと音を立て、一匹の餓鬼を吐き出した。不意をつかれて俺はのけぞる。

「冒険中だよ」

餓鬼は俺に微笑みかけた。俺はぞっとした。肝が冷えるばかりだ。満面の笑みで餓鬼は駆けてゆく。俺はその背中を呆然と見送り、足早にアパートへ帰って行った。

「おい、帰ったぞ」

足を引きずりながら玄関のドアを叩き、ゼエゼエ息を切らせながら紙袋を突き出した。

「子鬼がいた」俺は声を絞り出す。

「あ、抹茶ありがと」

女は暢気に笑顔を浮かべる。俺の言葉など全く意に介さず、紙袋を受け取るなり、ペタペタとスリッパの音を立てながらダイニングへ引き返していった。

「わけないよな」

俺は玄関に座り込んだ。家の中には案の定カレーの臭いが充満していた。

辛口カレーには甘過ぎるくらいの抹茶オレ。俺の流儀を心得て、女は律儀に実践する。あいつのいいところだ。シャワーを浴びてテーブルにつくと、ぬるくなった抹茶オレの隣に湯気の立つカレーが差し出された。

先に食事を済ませていた女は、俺の前に腰を下ろし、チューチューとストローを吸う。俺はカレーを三口。そして、辛みを帯びた口内を抹茶オレで中和した。

俺は不覚にも仄かな幸せを嘯みしめていた。

食事を終えて、残りの抹茶オレをチューチュー吸う。いつか見た本（電車の中吊りで表題をみただけだ）の影響でグランデサイズを注文してしまったが、食事をとりながら飲み干す量ではない。

話題はいつしか魚肉ソーセージ。カレーの具材になっていたからだろう。戦隊モノがパッケージになった魚肉ソーセージってあったよな。今でも売られているのかしら。当時は随分好んで食していた。すり身に合成色素をふんだんに練り込んで、明らかに健康を害す食品よね。成長期の子供にどうにかして魚を食わせたい親心と、子供のニーズが合致したんだろう。

「ところで、なんで魚肉ソーセージの話なんてしてるんだっけ？」

俺はゲップで応える。大盛りカレーとグランデサイズ抹茶オレですっかり胃が凭れた。眠い目をこすってまで議論する内容ではない。

「寝るか」

戸締まりやら、ガス栓やら、入念にチェックしないと眠れない質の女だ。俺は押入から布団を引きずり出して、一足先に倒れ込んだ。やがて消灯され、女の冷たい腕が俺の身体に巻き付く。俺は子供のように眠気で火照った身体を女に寄せた。

そして、カーテンを開けば眩しいほどの朝。

太陽のバカやろう。

俺はまだ胃凭れのする腹を指先で摘みながらため息をつく。夜も嫌いだ、こんな晴天を望んだ覚えもない。ウンザリするほどの強制力を持つ青空には閉口させられる。醜い腹を晒しながらでリアルファーマー反対デモ行進などする以外、抵抗策が思い浮かばない。昨晚感じた仄かな幸せも、思い出すだけでおぞましい。

そして、俺は家を出た。青空の下、また全てに悪態をつきながら駅までの遊歩道を闊歩する。

疾走する男児

男児は走り続ける。「お友達」を求めて走り続ける。

はじめに出会ったのはもっと小さな男児。ヨチヨチ歩く姿が愛おしくて思わず抱きしめた。すぐに大きな手が引き剥がした。「ダメ」と言う声に応答して男児はまた駆け出す。勢い余って少し大きな女児に激突した。「やめてえ」と罵られる。金切り声に応答してまた駆け出す。下り道で加速。バランスの悪い身体はすぐに転倒。斜面であろうとそこに凹凸でもなければ涙は流れない。助けの手が無いことを認識して間もなく立ち上がる。下り坂の先に花壇を見つけた。これは好きだ。煉瓦づくりの縁によじ登る。フラフラ

進んでポンッと飛び降りる。上手に着地ができると気持ちがいい。ここに新たな遊びフラフラ・ポンツを発見。男児は繰り返す。花壇の縁によじ登る。フラフラ進んでポンツ飛び降りる。フラフラ・ポンツ。フラフラ・ポンツ。これは好きだ。「お友達」探しをし
ばし忘れて。繰り返す。繰り返す。ふと見上げれば空高く雲を引く飛行機。とても高く
飛ぶ小さなそれを指さし「飛行機」と言う。世界は魅力的で男児は忙しい。

そして「お友達」にたどり着く。背格好が同じくらいの男児だ。今度はいきなり抱きつかないように。はじめに思いつく限り「お友達」の名前を呼んでみる。残念ながら「お友達」の名前がそれと同じとは限らない。むしろ同じでないことのほうが多い。案の定「お友達」から応答はなかった。男児は「お友達」に駆け寄る。すると「お友達」は背中を向けて駆けだした。遊ぼうの合図。「お友達」は逃げるのが好き。男児は走ることが好き。二人の好きは合致して遊びがはじまる。男児は追いかける。「お友達」と呼び合いながら。喜びの表情を浮かべながら。階段を駆け上り。スロープを駆け下り。縁石を見つけてはフラフラ・ポンツ。風を切って二人は遊び続ける。

男児のほうが少し元気が過ぎたようだ。「お友達」は息を切らせて座り込んだ。男児はその隣にしゃがみ込む。そして「お友達」抱きしめる。でも「お友達」は知り合って間もない男児に抱きしめられることが嫌い。途端に大人みたいな顔をした。怪訝な顔が大人みたい。「お友達」は立ち上がる。背中を向けて駆けだした。「お友達」は逃げるのが好き。男児は走ることが好き。二人の好きが合致すればすぐに笑顔が返ってくる。

飽きることなく繰り返される遊び。やがて陽が傾く。大きな手が男児をすくい上げた。

「帰ろう」

男児はまだ遊びが足りない。無理矢理連れ去ろうとする大きな力の中で懸命にもがく。その力はとても大きくとても暖かい。「お友達」が遠く離れてしまうと男児はとても疲れていることに気付いた。小さな体には遊びが過ぎた。樹洞に眠る椋鳥。夢の中。遊びは続く。

失速するおっさん

「一気に加速してあとは惰性で走ってください」

それが電車の走り方らしい。某シミュレーションゲームで仕入れた知識だ。己にも通じるものがあるだろうと、俺は朝マラソンで実践してみる。食事制限で減量に成功して気をよくしていたところだ。

タンスの奥に眠っていたマンチェスター・ユナイテッドのユニフォームを引っ張り出

し、そいつに袖を通して家を飛び出した。未明の雨もあがり、あたりはまっ白な朝靄に包まれている。俺は二、三度屈伸してから一気に加速した。気分はデイビッド・ロバート・ジョゼフ・ベッカム。一〇年も昔に外人の露天商から購入したユニフォームだ。サッカーに関する知識も古ければ、ユニフォームのデザインも古い。その真っ赤なシャツの胸元にはには日本では聞かなくなった携帯電話会社のロゴが刻まれている。

そして、ベッカムは一気に失速した。息が切れる。歩きたい。否。無心になれ。すれば惰性で走れないこともない。惰性、惰性、無心、無心。心の中で唱えているうち、我に返れば足を引きずって歩いていた。

朝靄もいつしか晴れ上がり青空が広がる。閑静な住宅街を真っ赤なユニフォームのおっさんが息を切らせてダラダラ歩く。不意に恥ずかしくなり、想定していた順路を逸れ、身を隠すように緑道の中へと入っていった。

木々に囲まれた空間で幾分かフレッシュ。息を整えながら歩いていると、ランニングスパッツで無駄のない肉体を晒す青年が颯爽と追い抜いていった。俺は多少の対抗意識を抱きながら再び駆けだす。それでも、また一気に加速するほど学習能力は欠落していない。電車は電車。俺は俺。

早朝の緑道は如何にも健康的な空気に満ちている。既に遠くを走る若者。重たい体をサウナスーツに包んでウォーキングに励むおっさん。俺はまだ前者でありたいものだと幾分か加速する。おっさんを追い抜いたところで、向かいから犬をつれて歩いてきた老夫婦がにこやかに頭を垂れた。

「おはようございます」

俺は咄嗟に声が出ず、会釈でやり過ごす。背後からバリトンヴォイスの挨拶が響いた。

続いて、ポニーテールを揺すりながらピンク色の可愛らしいウェアを纏った若者が駆けしてきた。そこで、俺はまた幾分か加速。目の前には未明の雨でできた水たまり。俺は大きく膝を持ち上げて飛び上がりながら彼女とすれ違う。

気持ちは確かに水たまりを飛び越えている。が、肝心の足がついてこない。俺は飛沫をあげて着水した。

「うあ、ごめんなさい」

反射的に水たまりで半回転、踵をそろえて背筋を伸ばす。そして、七五度に頭をさげて、謝罪の気持ちを伝える七秒間。匠の技である。顔を上げると彼女はズボンの裾に小さなシミをつけたまま走り去っていた。どうやら耳がイヤホンで塞がれていたようだ。バリトンの朗らか笑い声を響かせながら、サウナスーツのおっさんが追いぬいていく。俺はうつむいてしばらく水たまりに立ち尽くした。

靴がグシヨグシヨで気持ちが悪くなったところで、俺は水飛沫を上げながら三度地団駄を踏む。

「オ・レ・ハ・」

最後に大きく飛び上がり両足で着水。

「オーレイ！」

一番大きな飛沫をあげた。

そして、おっさんの背中に向き直り、再び駆けだした。おっさんを突き飛ばすほどの

力強さと、遠くを走る若者をも優に抜き去るスピードをイメージしながら、俺は一気に加速した。

宍戸ストロング・イナフ

E=mc² について自分なりに考察をしてみた宍戸は切り出した。

「ほう」

「結果から言えば、あいつの言っていることは正しい」

「あいつというのは？」

「おまえ、そんなことも知らないのか。アルベルト・アインシュタインだよ」

まさかとは思ったが、俺はいい加減に二、三度頷いた。

スキンヘッドにラウンド髭を生やした店長は、今夜も朗らかな表情で小鉢を差し出す。

「店長の笑顔は今日もすばらしいね」

宍戸は恒例のように両手をすりあわせてその恵比寿顔を拝む。店長は恒例の苦笑い。俺はジョッキを握りながら恒例の傍観だ。

宍戸は小鉢のすじ肉をつまんでクチャクチャと音を立てる。そして、喉越し程良いタイミングでそいつを飲み込むと、カウンターに並ぶ俺に向き直った。

「でも、おまえの無知を責めちゃいかんよな。俺だって生まれながらにアルベルトを知っていたわけではない。ある時点を境に知ったまでだ」

いくら何でもあっかんべえしたファンキーな肖像写真と E=mc² くらいは結びつくが、あえて反論はしない。やたらヒトを肯定しようと努めているとき、あいつは決まって婆さんのことを思い返している（詳しくは既刊の「宍戸シング・プライゼス」をご覧ください）。

「でも、婆さんの肯定っぷりはマジで半端ないからな」

案の定、何度も聞かされた話をはじめた。何を話しても「そうかい」と目を丸くした婆さん。記憶は薄れていく。置き換えられてゆく。だから、本当に大切なものは何度も繰り返さないといけない。のだそうだ。

爺さんに先立たれた晩年の婆さんは施設暮らしだった。宍戸は面会の度、婆さんの手を取ってベッドから茶飲み場までを歩いた。

「一番綺麗な笑顔を見せる瞬間なんだな」

宍戸は一時の恋でも思い返すように目をうっとりさせせる。

「その笑顔のためだけに通っていたようなもんだ」

店長は口元に微笑みを蓄えながら、塩むすびを載せた皿を差し出した。黒々と体毛を生やした剛腕から繰り出される繊細な塩むすび。宍戸は綺麗な正三角形をしたそれを持ち上げ、照明に照らす。適度に握られた米の粒が煌めく。

「おにぎりというよりおむすびって感じだよな」

おむすびはおにぎりの女房言葉だという説がある。どちらも握り飯より丁寧だが、比較すればおむすびの方が優しいような気がする。煌めくおむすびに目を細めていると、いきなり口の中に突っ込まれた。

俺は嚙めっ面を宍戸に向けたままそれを咀嚼し、そして、飲み込む。

「なんか言えよ」

「うまいね」

「おまえは本当に何も考えていないよな」

どうもあいつは俺を肯定できないようだ。

「おまえは俺の婆さんを気取っているのかもしれないが、婆さんは別に何も考えていなかったわけじゃないぞ」

他人の婆さんを気取るヤツはそういない。勿論、俺だってそんな気はない。

「婆さんは俺の話に耳を傾けて、全て納得の上で肯定していたのだ」

「ちゃんと聞いてるよ。おまえの話は飽きないもん。相槌すらしなくても話し続けてくれるから全く気が楽だよ。リラックスしているんだ。俺は」

宍戸は何か腑に落ちない様子で眉間に皺を寄せる。

「で、 $E=mc^2$ についての考察はなんなのよ」

俺は話を逸らすように問いかけた。宍戸は歯型のついたおむすびを皿に戻して話しはじめる。

「例えば、月に一度の塩むすびが幸せの絶対基準とする」

そして、手付かずの新たなおむすびを持ち上げた。

「来月は何個かじれるだろうか。そんなくらいシンプルに考えれば、何の迷いもなく生き方は決まってくるというものだ。塩むすび不変の原理とでも言おうか」

俺は絶句するほか無い。

「なんか言えよ」

「無茶言うな」

どうやら宍戸は何やら悩みを抱えているようだ。

爆音と満月

音にまみれていないと生きた心地がしないんだ。すました顔で水たまりに浮かぶ満月を眺めるけれど、イヤホンから大量の爆音が注ぎ込まれているよ。

正論に正論を重ねてまるで隙がない。世界は実に正しすぎる。俺を窮地に追い込む日常をクダラネエナと一蹴する気概もなく、ただただ爆音に耳を預ける。一滴たりとも外には漏れないようシリコン製の耳栓を取り付けた特製のイヤホン。そいつで耳を塞いで、俺はまったく善良なりスナーだ。他人様に迷惑をかけるつもりはないのだ。意志を持たない。銜わない。デカイ音だけを追求した音楽を探している。そんなもの音楽ではないというのなら、レールを刻む地下鉄でもいい。油の切れたスクラップ工場でもいい。脳味噌が麻痺するほど鼓膜が震えるものなら、どんな音だって構わない。日常が吐き出す副産物としての爆音。アバンギャルドを銜った退屈な音楽より余程俺の脳味噌を刺激する。

明日、誰にも見つからないようにそっと地下鉄に下りてみよう。この辺にスクラップ工場はみつからないから。地下鉄の奥深くに適当な安全地帯をみつけて身を丸くしていよう。それはとてもいい思いつきのような気がする。俺だけの安全地帯。できるだけ駅の光が届かない地下鉄の奥深くがいい。

休日の予定が決まれば幾分か気が晴れた。俺は満月を踏みつけて歩き出す。光の粒が舞い上がり、直ぐに輝きをなくして夜のアスファルトに染み込んでいった。

しかし、すぐに大きなため息をついて立ち止まる。そして、頭を振る。何が不安かって、きっと明日になればどうでもよくなってしまうことだ。朝日を浴びた俺は駅に向かうなんて気になれない。地下鉄深くにうずくまるなんてありえないだろう。ならば、もっと素敵なことを考えればいい。河原に季節を探しに行きましょう。なんて。結局、俺は昼過ぎに起き出してテレビを付ける。PCを立ち上げる。一步も外に出ないでひたすら情報を漁る。面白いことはないか。必要なことはないか。そこに面白いことはない。必要なことなど何もないのに。

せめてこの夜をもっと満喫しよう。そして、俺は満月を浮かべた水たまりに向き直った。爆音に包まれた穏やかな夜だ。雲のない。風のない。ガラスの固まりのように安定した空気。

俺は脳味噌に満たされたそいつを吐き出すように、水面に向けて三度声を張り上げた。ぼんやりと月が揺れる。それでは厭きたらず月に跪く。水たまりをまたぐように両手をついて水面に顔を寄せる。そして、もう一度、大声を張り上げる。しかし、そこに満月はいない。そりゃそうだ。水たまりに沈んでいるわけではない。満月は俺の背中に張り付いた。心なしかぼんやり暖かい。そのまま仰向けに転がって空を見上げた。喉は焼けた。満月が俺を見下ろしている。イヤホンを引き抜くと、遠くには消防車のサイレン。アスファルトを削るスケートボード。辺りは思いのほか静かではない。俺は満月に焦点を絞り込み、そこからできるだけ多くの情報を引き出す。俺の脳味噌が全て月光に置換されたなら、まだしばらく穏やかな気持ちでいられそうだ。

覚えがない

休日のダイニングテーブル。俺は彼女と向き合ってコーヒーを啜る。

「あんまり覚えてないや」

口に付けたマグカップをテーブルに置いて、苦笑いを浮かべた。実際のところ全く覚えていないのだ。

「欲がないのよ。君のいいところね」

彼女は小さなため息の後、ほのかに微笑んだ。出会った頃はあまりに記憶力の無い俺に呆れていたが、最近ではもう諦めたようだ。そうか、欲がないのか。と、俺も開き直る。それでいて他人の失敗談なんかはよく覚えていてる。要するに性根が曲がっているのだ。

「でも、なんで忘れるのかしら？ あの時だって、君が行きたって言い出したんでしょう」

あの時とはどの時か。昔の男と間違えているのではないかと訝るが、そうだと言いつける確証はない。

「ほら、どこだっけ。何かの跡地がバラ園になってたじゃない」

かく言う彼女もうろ覚えなのだ。一向に話が進まない。

「もう一度あそこに行ってみたいのよ。最近、妹の元気がないから、バラ好きなあの子を連れて行ってやりたいの」

「素敵な兄弟愛だね。姉妹愛って言うのか？」

是非とも思い出してあげたいところだが、いくら頭をひねっても何も出てきやしない。そもそもなんで俺がバラ園になんかに行きたがったのか。

「バラ園で検索してみたら？」

俺の無責任な発言にムツとしたのか、彼女は語気を強めた。

「君と行ったあのバラ園がいいのよ」

なんだかいい気分がした。

そして、それはやはり俺が彼女と二人きりで行ったところなのだと確信する。

「バラ園じゃなかったかもしれない。確か大使館だか領事館だかの跡地よ。バラの植えられた立派な庭があってね。戦争だか震災だかで廃墟になった洋館の一部が残されてるの。ちょっと感じがよかったのよ」

彼女の言う風景を思い描いた。誰もいない洋館。色鮮やかなバラの庭園。それは確かに絵になる素敵な場所だろう。小高い丘の上。いくつもの階段を上り詰めたところにそれはある。庭園の隅には見晴らし台があって、ん？

「ちょっと待てよ」

「なんか思い出した？」

彼女は前のめりになって期待のまなざしを向ける。俺は眉間に皺を寄せたままマグカップを持ち上げる。香ばしい湯気を吸い込みながら、苦いだけの汁を啜る。はじめは強がりて飲みだしたブラックコーヒー。やがて癖で飲み続けたブラックコーヒー。今ではカロリーを気にして飲むならブラックコーヒー。

「あ」

彼女の薄い唇が半開きになる。

「ちょっと待って、私も思い出しそう。確か海の近くよ」

「海の近くう？」

見晴らし台から眼下に広がる大海原。俺は途端に混乱する。

「海なんかあったのか。あとちょっとのところで分からなくなったぞ」

「あ、ごめん。じゃあ、今の無し」

「無しって、あったんだろう？」

「分からないわよ。ふとそんな気がしただけ」

本当にそれは実在する場所なのか。彼女の妄想に付き合わされているだけの様な気もするが確信が持てない。嗚呼。己の健忘癖が忌々しい。

その絵になる素敵場所は、実際に絵だったのではないかとも考えられる。美術館で見た作品と記憶違いをしているのではないか。かつて、モネだのルノアールだの印象派の作品を集めた絵画展を見に行ったことがあった。その中にそんな一枚があってもおかしくない。

「ルノアールとかの絵なんじゃないのか？」

「なにそれ。喫茶店？」

俺は途端に口を閉ざす。考えてみれば、彼女と印象派の絵画展など行くはずがない。なにせ座右の銘は「ガラスの底に顔があってもいいじゃないか」である。廃屋とバラならば廃屋を愛でるに違いないシュルレアリストだ。

「あ」

再び薄い唇が半開きになる。

「思い出したわ。やっぱり海よ。誰もいない洋館。色鮮やかなバラの庭園。小高い丘の上。いくつもの階段を上り詰めたところにそれはあるの。庭園の隅には見晴らし台があってね。そこから港が見えるのよ。港って言うかガントリークレーンが並んだコンテナターミナルよね。コンテナターミナルが見える丘の公園よ」

彼女は目をキラキラさせながら、両手を頭上に結んでしなやかに体を反らす。

「嗚呼、スッキリ。週末、車出してくれるわよね」

「あ、うん」

俺はまるでスッキリとしない頭をかきむしりながら、曖昧に頷いた。

その公園に行ったのは本当に俺なのか。

一緒に絵画展へ行ったのは一体誰だったのか。

とりあえず忘れてしまおうと、俺は話を逸らす。

「ガントリークレーンって何？」

冬にバナナが呼んでいる

もう二度と冬なんて来ないのでないか。

毎年そう思う。一〇月を過ぎててもまだ暖かい。一一月に入ってもウチの小僧ならまだまだ短パンでいけそう。そして、師走を目前にしていきなり来ました。冬。

秋らしい秋もなく、いきなりの冬らしい冬。俺は黒ウサギファーが襟に付いたお気に入りハーフコートに纏って会社を後にする。コートに首を埋めると、頬をくすぐるファーが心地いい。

冬はいいね。冬は好きなんだ。ファニーフェイスの君が五割増に可愛く見えて、頭の弱い俺が二割増に賢く見える。

でも、いきなり冬は寒いだろ。

俺は黒ウサギに頬を埋めながら肩を怒らせる。ガタガタ震える。嗚呼、肩がこる。

年末を共にするポップな音楽でも用意しておきたいと思い立ち、乗り換え駅の改札を抜けた。そして、某外資系大型レコード店に立ち寄る。誰も考えることは同じなのか。店内にはやたらと多くのヒトが蠢いていた。ひとまず鼻先にしているミュージシャンのコーナーを見て回る。ネットオークションで高値で競り落としたCDが再発されていることを知り落胆する。聴きたい曲が収録されていないベスト盤を手に取り鼻を鳴らす。そして、やたらと韓国勢の躍進が目につく。耳につく。J-POPと書かれたフロアにもかかわらず三分の一は日本勢でない。フロアに響く流暢な日本語も歌っているのは日本人でない。

俺は気味が悪くなり、Rock and Popsと書かれたフロアへ向かった。お気に入りのロックバンドは相変わらず新譜を出さない。ボーナストラックを追加して再発されたり、高音質盤に焼き直して再発されたり。こいつら生きているのだろうかと言ふ。このフロアには同じく再発されたローリングストーンズのナンバーが回されていた。本物はいいよな。そうは思うが、何度も聴いたナンバーは正直言って退屈だ。

キラキラのポップミュージックを求めて、キラキラのレコード店に来たのだが、大量生産されたそれらと群がる若者に目眩を覚え、とても数千円を払おうなんて気になれなかった。必要な音楽は粗方手元にあるのだ。こんな気分には「生活の柄」が聴きたい。バナナジャケットで有名なアルバムに収録されたフォークソング。

俺は店を出るなりイヤホンをつっ込んだ。キラキラのポップミュージックとはほど遠い歌声に耳を澄ませて、ゆっくりと歩き出す。改札をくぐり、お気に入りの一節になれば人目をはばからず口ずさんだ。

「秋は、秋からは浮浪者のままでは眠れない♪」

たくさんの人々が交錯する巨大な駅。一節歌ったところで誰も気にはかけはしない。空気の臭い地下構内を歩きながら、学生時代の友人と交わした馬鹿な会話を思い返す。

「これだけヒトがいりゃ、常に誰かしら尻をしているだろう」

「だから臭いのか。ここは尻の吹き溜まりか」

便所に立ち寄っても辺りの匂いと変わらない。便所にしては臭くないが、駅にしては臭い。小用を済ませて、重たい体を引きづりながら階段を上り、ホームに立つ。澱んだ空気から解放されれば、とたんに寒い。

俺は黒ウサギに頬を埋めながら肩を怒らせる。ガタガタ震える。嗚呼、肩がこる。

ロング・アンド・ワインディング・コート

昨今の若者の間では丈の短いコートが流行っているのか、猫も杓子もハーフコートだ。それならばと、俺は押入で眠っている丈の長いコートを引っ張り出した。学生時分に購入したグレーのロングダッフルだ。コートを掲げながらしばし追憶。今では付き合のない野郎どもと買いに行った一品だ。甘い思い出があるわけでもない。それでも、あれから一〇年以上も経ったかと思うと感慨深くなる。コートの丈に合わない押入で吊されていたものだから、裾がヨレヨレになっている。

ずっしりと重量感のあるコートに袖を通せばほんのりカビ臭い。クリーニングに出したのはいつのことだったか。明日、朝一番でベランダに吊すとしよう。布団叩きで三〇回もひっぱたけば、この冬くらいは着られないこともない。

さて、グレーのロングダッフルには何を合わせよう。デニムのパンツならば濃紺がいいだろう。スニーカーよりはエンジニアブーツがいいだろう。モッズ連中が好むようなタータンチェックのパンツでもいいかもしれない。

明日が楽しみになってきた。エンジニアブーツだなんて何年ぶりだろうか。タータンチェックのパンツなど持っていないから、ひとまず濃紺のブルージーンだ。いいね。エンジニアブーツに濃紺のブルージーン。ロングダッフルにエンジニアブーツ。濃紺のブルージーンにロングダッフル。どこをとっても響きがいい。どこをとっても健全な男子だ。

翌朝、俺は予定通りヨレヨレのロングコートをベランダの物干し竿に吊した。そして、布団叩きを求めて押入に積み重なる布団の隙間に腕を突っ込んだ。手に掴んだものを引っ張り出すと、掃除機の伸縮式すき間ノズル、ポディーブレード、卒業証書の丸筒。

「確かこの辺だが」

いつか客人が来た時のためにと無駄に詰め込まれた布団の間から、日用されなくなっ

た用品たちが発掘される。毛玉取り器、ジェンガ、湯たんぼ。

「湯たんぼっ」

思わずつぶやいた。今年の冬は皆の節電意識から湯たんぼの売れ行きがいいと、テレビが報じていた。確かウチにもあったよなと思いつつ、なかなか探そうとはしなかった。ピンク色したポリ製のそれは別れた女が置いていったものだ。不意に人恋しくなり、女の残り香を求めて押入の布団に顔を埋めた。大きく息を吸い込んだ途端、無数の胞子が粘膜を刺激した。俺は噎せ返り、己の噴射で後ずさる。そして、畳に尻餅をついてせき込み悶えた。アバンギャルドなブレイクダンスを披露した後、悶絶寸前でなんとか立ち直った。

涎を垂らしながら息を整える。女がいた頃、こんなにも生活は荒廃していなかった。思えば女の置き土産は湯たんぼだけではない。伸縮式すき間ノズルだって、毛玉取り器だって女がどこかからか仕入れてきたものだ。ジェンガだって当時は活躍したものだ。

結局、どの層に手を差し込んでも布団叩きはみつからなかった。考えてみれば、近年ベランダで布団を叩いた記憶がない。そもそも、ウチには布団叩きが存在しないのではなかろうか。俺は散乱した非日用品を見回し、一番手頃なものを拾い上げた。

「これだろ」

勿論、ボディブレードだ。ひとまず本来の使用方で上下に振ってみる。

「嗚呼、来る来る」

こいつが売り出された当初、マッチョな男たちが両腕をつきだして不可解な運動をする通販番組に眉をひそめたが、翌週にはウチに届いていた。俺の弛んだ体を見かねて女が注文したのだ。三日と続きはしなかった。見切られたのはそれからだったろうか。

女の不機嫌な表情を思い返し頭を振った。そして、ボディブレードを握ってベランダへと勇んで行く。ダッフルコートの風上に立ち、俺は大きく振りかぶって一撃をくわえる。鈍い音を立ててコートがしなる。埃だか胞子だか知れぬ粉末が舞い上がり、風に吹かれて消えた。

「ほう」

十分な効果が確認されると幾分か気分がよくなり、右から左からボディブレードを振り回した。謎の粉末をまき散らしながら、不意に大きな風が吹く。勢いに任せてボディブレードを振り抜くと、プラスチックの衣紋掛けはポキリと音を立て、ロングコートが空へ舞い上がった。

俺は思いを馳せる。舞い上がるロングコートに飛び乗り、キント雲さながらひと飛びで一〇万八〇〇〇里。地球にしてざっと一〇周分だ。さあ何処へ行こう。

なんて無理無理。あんなヨレヨレコートなど何処へでも飛んでいってしまえばいい。俺は気づく。本当は、過去にまつわる一切を捨ててしまいたかったのだ。そして、部屋に散乱した非日用品に振り返る。ボディブレード、掃除機の伸縮式すき間ノズル、卒業証書の丸筒、毛玉取り器、ジェンガ、湯たんぼ、そいつらを拾い上げ、強い風に乗せてベランダから放り投げた。

宍戸ポップ・スター

宍戸からの誘いが無い。

そろそろあっても良さそうな頃だが一向に連絡がない。再会した女とうまくいっているのか。それならば喜ばしいことだ。嫉妬しているわけではない。断じて。

正月休みに入ると、毎晩、幼い息子を寝かしつけてから細君と酌み交わす。一年間の息子の成長を振り返り、お互いの苦労をねぎらう。やがて、話題は尽きる。俺はリモコンに手を伸ばし、息子のために撮りためたSFアニメをぼんやり眺めながら焼酎の湯割りを啜る。ポケットから取り出したそのクスリって、あのライトと被ってるだろ。誰しも思ったであろうことを内心で突っ込む。そのクスリを過剰摂取した少年の体が膨らみはじめる。町にいられなくなった少年は学校の裏山に身を潜めるも膨張は止まらない。ついには雲に届くほどに膨れ上がり、滝のような涙を流した。

いつしか親父と二人で見たテレビ番組を思い返していた。随分とポップな映像だったけれど、あれはSFではなかった。

「あの事件は俺が生まれるよりも昔のことだから、リアルタイムで見ていた訳じゃないんだよな。でも、随分と鮮明に覚えてるんだ。過去の事件をネタにしたような番組だったんだろう」

クレーン車に吊された家屋解体用の大鉄球。そいつを繋いだ引き綱がゆっくりと引き絞られテイク・バックされる。そして、引き綱が放たれる。大鉄球は唸りをあげながらスイングし、大音響を発しながら山荘にめり込む。その映像と事件の名称だけが幼い俺に焼き付いた。事件を振り返る番組であったなら、おそらくその背景や事件後に発覚する惨憺たる状況についても解説があっただろう。しかし、それらについては何も記憶していない。幼い時分のことだから。あの山荘だってバイキンマン城と同じように思っていた。ナントカロボットのロケットパンチで悪の秘密基地が崩壊。安っぽい特撮のような光景は、あのころの俺にとってかえって刺激的だったのだろう。

「基本的にガキって重機とか好きでしょ」

「警察も大胆よね。警察だからってあんなこと許されるわけ？」

「モンケーン」

「何それ？」

「あの鉄球」

ふうん。彼女は興味がなさそうに鼻で返事した。

「男って役に立たない知識を披露したがるよね」

俺は先手を打つ。彼女は首を傾げた。

「そう言えば、なんて言ったっけ？ あのヒト今年死んだんでしょ」

二〇一一年二月五日夜、東京拘置所にて事件の中心人物である元最高幹部が脳腫瘍のため死亡。晩年は数年に渡って危篤状態だったそうだ。世間の興味がなくなった古びた事件だ。その訃報は大したニュースにはならなかった。

そのニュースを耳にしたときに俺が思い返したのは、やはり親父と見たブラウン管の中のモンケーンだった。実際のところ、彼女はあの山荘まで辿りついていない。山狩り中の警官隊により発見、逮捕されている。

携帯電話が震え、ダイニングテーブルを小刻みに打つ。咄嗟に拾い上げれば穴戸からのメールだ。

昨日、気味の悪いスカイツリーを見た。

俺は首を傾げて彼女に尋ねた。

「スカイツリーっていくつがあるんだっけ？」

「一本じゃない」

「一本！ あれを一本と数えるのは、なんて言うか、気前がいいね」

「なんて数えるの？」

俺は腕を組んでしばらく考える。

「一基？ 一棟？ 一つでいいんじゃない」

「じゃあ、電信柱は？」

「一本かな」

「なら、一本でいいじゃない。似たようなものでしょ」

再び携帯電話が震えた。今度は電話だ。

「返信がないから電話したぞ」

「おまえが変なメールを寄越すから、ちょっと議論していたんだ」

「議論？」

「スカイツリーの数え方だ」

「数えるたって幾つもあるものじゃないだろう」

「そうだな」

「丁度いい。スカイツリーの件で電話したんだ」

「おまえがふった話題だろう」

「昼間、天気が悪かったろう。夕暮れ時なんか早くから暗くてさ、そんな時に電車の中からスカイツリーを見たんだ。馬喰町のあたりだったかな。イルミネーションなんかは灯ってなくてよ。どんよりした灰色の空に同じような色したタワーが突き刺さってるんだよ。昭和生まれだからかな。どうもあのタワーは気味が悪い」

「モンケーンだな」

「なんだそりゃ？」

あいつならば、そんな無茶が許される。気がする。

「さあ今こそモンケーンをテイクバック！」

「酔っぱらってんのか？」

俺は口元に笑みを浮かべたまま、湯割りを啜る。

「ちょっと言ってみただけだよ」

君のくれた阿呆

ウサギをウサギちゃんとは呼べません。熊がドングリを頬張る姿など真似しません。三流芸人のように顔芸で笑いはとりません。

そんなの絶対に無理です。

しかし、気付けば、息子から一つでも多くの笑いを得ようと、懸命に親父としての技能を駆使している。いつの間にそんなものを体得したのか。就寝前の読み聞かせでは、書かれていなくともウサギをウサギちゃんと呼ぶ。熊がドングリを頬張らばゴブゴブゴブと珍妙な声をあげる。カエルが跳ねればはちきれんばかりに頬を膨らませて目を丸める。

驚くことに、それらがまるで馬鹿げたこととは思えない。必要とされる阿呆に信念を貫く。他人様には決して見せられない己の顔芸にだって、賞賛の拍手を送りたい。

しかし、俺などまだ序の口。上には上がいるものだ。

息子を連れて公園へ行くと、幾人もの子等を追いかけ回しているをしているオッサンがいた。時折、雄叫びをあげ、気性の荒いマウンテンゴリラか、架空の怪獣か。その顔には一つの笑みもなく、傍目にはやや奇怪でもある。これは本当に必要とされる阿呆なのかと訝るが、相対する子等は皆満面の笑みを浮かべている。逃げ回るは全部で五、六人。年の頃は小学生の低学年から高学年までバラバラだ。全ての子等の父親とは考えにくい。ひょっとすると誰の親でもないのではなからうか。ヒトの親とは考えにくいほど、真に迫る獣ぶりであった。

案の定、息子も獣化したオッサンを見るなりに目を輝かせた。そして、逃げまどう子等に紛れて遊びをはじめた。これは有り難いとベンチに腰を下ろすが、他人様に任せきりでいいものか。俺はやや遠慮がちに浅く腰掛ける。「いつでも立ち上がれますよ」とアピールするように、両膝に両手をつけて我が子を見守った。

ルールはいわゆる「高鬼」のようだ。オッサンは遊具に上ろうとはせず、遊具から遊具へと逃げ回る子等のみを追いかけ回した。

俺は口を尖らせる。先ほどからどうしても拭いきれない違和感がある。

迫真の獣を演じるオッサンの目が笑っていないから。確かにそれもある。しかし、もう一点気になることがあった。

オッサンの格好がどうにも見窄らしい。

俺の推測では、このオッサンは誰の親でもない。住所不定無職。訳ありヒッピーさんではないか。これがビート時代のヒッピーさんであれば、愛あるオッサンなのだとも多少の安心感を得たかも知れない。しかし、あれは高度経済成長期だったからこそ一つのカルチャーとして成り得たのであって、現代のヒッピーさんはもっと深刻である。

勝手な推測が確かなものだとすれば、このまま息子を、そして、いたいけな子等を、任せきりにしてしまっているのか。

暮らしが困難でも、本当に子供が好きなのかも知れない。偏見で他人様を悪く言うものではない。そうは思うが、どうしても子等を追いかけている当人に充足感が見られない。どう見ても目が笑っていないのだ。

貧窮した生活を紛らすために、無心になりたいのか。憂さ晴らしに子等を追いかけて回しているのか。隙あらば拳骨の一つでも振り下ろそうという魂胆か。まさか、今夜の食材を狩りに来たわけではあるまい。

とてもベンチに寛いでなどいられなくなってきた。かと言って、勝手な推測だけで笑顔満開に遊ぶ子等を止めるわけにもいかない。俺はやや尻を浮かせて、両足をプルプル振るわせながら様子を見守った。顔からは笑みが消え、眉間には深い皺が寄った。

俺の異変に気づいた息子が立ち止まる。怒られたと勘違いしたのか、口を半開きに俺を見つめた。そこにオッサンが迫り来る。俺は耐えきれずに立ち上がった。

「逃げろお！」

叫び声をあげた瞬間、オッサンは息子を捕まえて高く抱え上げた。子等の笑い声が弾け、皆一様に息子を指さし歓声をあげる。続いて、オッサンは息子を遊具に下ろして顔を寄せた。

「食あべちやうぞお」

俺は大声を上げながらオッサンに駆け寄る。

「食うなあ！」

すると、一人の女兒が俺とおっさんの間に分け入った。

「パパッ」

刹那、果敢な娘が、獣化したオッサンからこの俺を守ろうとしているのかと勘違いした。しかし、俺に娘はいない。女兒はオッサンの足にしがみつき俺を睨みつけた。「私のパパに乱暴しない」でと目で訴える。パパなのか。俺は立ち止まる。食われかけたはずの息子は満面の笑みを浮かべたまま。そして、オッサンがゆっくりと振り返る。獣色の失せた目が俺に訴えかける。

何故お前はもっと本気になって子等と遊ばないのだ。

続いて女兒を抱え上げたオッサンの顔は、父親そのものであった。白いワンピース姿の娘がオッサンを彩る。その格好は見窄らしいのではない。年相応に地味なだけだと気づく。我が息子は、その父娘の様子を見つめながら指をくわえていた。

俺は、未熟な己を嘆くように、雄叫びをあげながら息子に駆け寄った。

「食あべちやうぞお」

探してください

鍋にマロニーちゃんは欠かせない。鍋の半分がマロニーちゃんでも構わない。そして、おでんには欠かせないのはシラタキだ。半分シラタキだったらかなわんが、結んであるシラタキは真っ先にほぐして麺のように啜り上げる。基本的に麺が好きなのだ。啜りたいのだ。ならば蕎麦でもラーメンでも食べばいいだろうが、酒の肴が欲しいのだ。こう寒い日が続くと焼酎の湯割りが旨い。ならば、鍋だろう。おでんだろう。

その夜の鍋ときたらどうだ。

俺は鍋をつつく、マロニーちゃんを探して菜箸を操る。そして、箸に絡みつくそいつを摘み上げればエノキダケだった。俺は肩間に皺を寄せてそいつを鍋に戻す。

「お父さんっ！」

女房の声が響き、続いて、娘らの視線が突き刺さる。俺は渋々エノキダケを腕に移し、勢いよく啜りあげた。ポン酢が飛び散り、末息子の茶碗に飛び込んだ。

「きったねえな、おっさん」

「こら、お父さんになんてこと言うの！」

よくできた女房が声を荒らげた。しかし、マロニーちゃんがないのは如何なものか。仕事から帰ればまずは風呂。鍋の主役はマロニーちゃん。この二つに例外はない。

俺は銀鱈をつつきながら湯割りを一杯。そして、早々と席を立った。

「あらもういいの？」

「ああ、なんだか食欲がないようだ」

飯に関して文句があっても表明はしない。義父さんの遺言だ。俺は湯飲みに二杯目の湯割りを拵えて書斎へと引っ込んだ。

Steve Earle の Train a Comin' を回しながらリクライニングチェアに身を委ねる。嗚呼、至福。腹五分目くらいでチビチビ啜る焼酎も悪くはない。ダイニングからは女房と末息子の声が聞こえてきた。

「あんたのせいでお父さん機嫌悪くしたんじゃないの？」

「知るかよ」

俺は鼻で笑い飛ばす。実際のところ末息子のせいではない。

マロニーちゃんがないからだろう！

大声を上げながらダイニングへ戻ったらどうだろう。唾然とする家族の顔を思い浮かべて再び鼻を鳴らす。くだらない親父。つまらない親父。いつの間にか板についてきたものだ。

さらには面倒くさい親父というもある。自分で言うのもなんだが、俺はあまり家族に面倒をかけたことがない。日々に必要な銭だって些細な額であれ毎月口座に落ちてい

る。

俺は思いたったように立ち上がる。そして、ストックされたA4プリント用紙を一枚デスクに広げると、衣紋掛けに吊されたスーツの内ポケットからParkerのボールペンを抜き取った。MaruBatsu Labor Unionと刻まれたそのペンは会社で支給されたものだ。

ひとまず星野哲朗の詞を書き出してみる。そいつを読み直し、一行加えた。

一緒に死ぬのも愛ならば
離れて見守る愛もある
あなたのために別れを選ぶ
私の誠がわかるなら
さがさないで私をさがさないで下さい
でも やっぱり探してください 父

書き綴った用紙を掲げ、口角を持ち上げる。我ながら何とも面倒くさい親父だ。俺はいたく満足し、まず携帯電話の電源を切って引き出しにしまう。そして、ロングのダウンコートに身を包み誰にも気づかれないよう家を出た。

いやに星の多い空。こんな夜はひどく寒い。さて、どうして時間を潰そう。近所に行きつけの呑み屋があるでもない。駅前の本屋にでも足を運ぼうか。交差点を渡りコンビニエンスストアを横切る。「酒」の文字を見るとまだ少し呑みたい気分だ。冬のコンビニでいつも思うことがある。非常に簡単でヒット商品間違いなしのアイデアだ。

ホットドリンクの棚にワンカップを並べて置く。こんな寒い日にひや酒は飲めんだろう。もしくは、ワンカップを買い求めるおじさんに一言笑顔で尋ねて欲しい。「温めますか？」

フタをとってしまえば、レンジでチンできないこともないだろう。とは言え、コンビニでワンカップなど買ったことがない。ひょっとしたらやってくれるのかもしれない。

そんなことよりあれだ。俺は臭いに誘われコンビニへと入っていく。

目当てはもちろんおでんである。主役は緩く結ばれたシラタキだ。俺は発泡スチロールの容器とオタマを手にとり、迷わずシラタキとたっぷりの汁を装う。そして牛すじと大根だ。練り物はあまり好まない。シャキシャキのゴボウやニンジンに入った野菜天は旨いが、それがこれらのどれに該当するのか、やる気を感じられないアルバイトに確認してまで食いたいものではない。

レジを済ましてふと気づく。家出中の身だ。何処で食べよう。末息子と同年代と思われる小僧どもが店の前でカップ麺を啜っているが、混ぜてもらおう訳にもいくまい。末息子と言えば一〇年も昔に一緒に遊んだ公園があった。あそこならばベンチがあったはずだ。俺はおでんが冷めぬよう足早に公園へ向かった。

静かな夜の公園でベンチに腰掛け、はじめにシラタキを解く。そして、牛すじの串を抜く。最後に、大根を八等分に刻んで軽くかき混ぜた。最近、コンビニ飯に少々手を加えて食すチョイ手間料理という文化があるそうだが、俺にとってこのコンビニおでんの食いは昔からスタンダードだった。俺はすじ肉と刻んだ大根を上手いこと絡めながらシラタキを一気に啜り上げた。夜の公園の澄んだ空気を振るわせながら静寂を破る。日

本の啜り食い文化に万歳。

最後の一滴まで汁を飲み干すと、幾分身体が暖まった。湯割りの酔いもすっかり抜けた。そして、自分が残っていた置き手紙を思い返した。はじめに気がつくのはやはり女房だろう。書斎をノックして俺がいないことを知ると、首を傾げて辺りを見回す。デスクには不可解な置き手紙。女房は頓狂な声をあげながら裁判後の勝訴報告さながら紙を掲げてダイニングへと駆け戻るだろう。子等は唾然とし、娘がつぶやく。

「なんなのこのおじさん。ウザすぎる」

それはおそらく三女だ。俺は鼻を鳴らす。

「由季のおとうさんッスよね？」

不意に声をかけられ俺は振り返る。娘の名を気安く呼び捨てにするこの小僧は何だ。

「どなた？」

「由季のクラスメイトッス。さっきコンビニにいましたよね？」

「ああ、入り口でカップラーメン食べてた子か。よくおじさんのこと誰か分かったね」

「由季の携帯でお父さんとお母さんの写真見たんスよ。仲良いんスよね。由希が言ってましたよ」

否定することではないが、見知らぬ小僧にそんなことを言われては返答に詰まる。そして、おそらくただのクラスメイトではないと踏む。

「由季にメールしたら、お父さんに伝えてくれて」

俺の目は月明かりに浴びながら泳ぎはじめた。そして、恐る恐る尋ねる。

「なんだって？」

「小さいのでいいから牛乳買ってきて欲しいそうッス」

「ギョウニョウ？」

「なんかお母さんからみたいッス」

俺は何か突き動かされるように立ち上がる。すると風呂上がりのそのように目眩がした。そもそもの問題は何だったのか。一気に時間を遡る。その場でフラフラと立ち尽くす俺に不安を覚えたのか。小僧が駆け寄ってきた。そして、俺は小僧の両肩を強く掴んだ。

「マロニーちゃんがないからだろう！」

冷たい空気がピンピンした。

動物公園日和

ズーはいいじゃないか。

長年連れ添った女房と出向いた動物公園、俺は素直にそう思った。

夫婦は子供に恵まれず、一匹のセキセイインコと静かな日々を送っていた。会社勤めをはじめてから一体何度目の盆休みだろうか。何処へ行くでもないが、盆休みの前後に有給休暇を加え、いつもより長い休みを取ることにした。

「旅行でも行くんですか？」

俺の休暇がそんなに珍しいのか、若い連中は口を揃えて聞いてくる。悪気がないのは分かっているが、予定などないことを知りながらわざと尋ねているのではないかと僻み根性がこみ上げる。皆が出勤しているのを余所にのんびりとしてみたかった。それだけのことだ。

そんな休みに限って冴えない天気が続く。予報では盆休みの最終日（俺にとっては最終日の前日）から晴れ間が見え出すとのことだった。それにもかかわらず、

「結局、今日も雨ですね」

女房は茶を啜りながら呟いた。俺は新聞に目を通しながら「ああ」と応える。何処へも行かないにしろ雨には鬱々させられる。からりと空が晴れたなら、散歩がてら図書館に出向いて、雑誌でも捲ってから、その足で缶ビールを買って帰ろう。しかし、こんな天気に出歩くのは億劫だ。一日家で過ごした夜のビールも大して旨くない。

「何処か行かれるんですかい？」

お天道様にもからかわれているようだ。

「明日は、晴れますよ」

陰鬱な心持ちを察して女房は言う。

「そんなこと言われんでも、こいつに書かれてある」

俺は新聞の天気欄を指先で弾いた。

「そうでしたか。それは余計なことを言いました」

女房は五家宝を摘み、茶を啜る。続いて何を言うかと思えば、俺のささくれた心に追い討ちをかけてきた。

「明日、何処かへ行かれるんですか？」

俺は絶句して立ち上がる。そして、その場を立ち去ろうとした矢先、意外な言葉を繋いだ。

「動物公園にでも行こうじゃありませんか」

俺は阿呆のように口を半開きにして、女房を見下ろした。

「そんなつもりで休みをとった訳ではない」

「分かっていますよ。でも、いいじゃないですか」

あいつは言い出したら聞かないところがある。インコを飼うとなった時もそうだ。どことなくあの時と近いものを感じる。動物とのふれあいは子供がいないことへの慰めなのだ。そう思うと何も言い返せない。いい歳をしてからおたふく風邪などにかかってしまったのは俺なのだ。

「好きにすればいい」

再び座り込むわけにもいかず、そう言い残して自室に籠もった。

二人揃っての外出となれば、随分と久しぶりだ。お義母さんや足の悪い義姉さんの面

倒を見ながら女房も大変な日々を過ごしていることだろう。ここらであいつの好きなように休日を過ごすのも悪くない。

俺はコンピューターの電源を入れ、動物公園を検索した。都内だけでも思いのほか在るものだ。俺はその内容や所在地などから二つの選択肢に絞り込んだ。

パンダをとるか、コアラをとるか。

俺は女房の顔を思い浮かべる。円らな瞳、不恰好な鼻、小さな体、どれを取ってもパンダよりコアラのほうがお似合いだ。思わず鼻が笑う。そして、遠足前夜の少年さながらワクワクしはじめた。

ふと思いつき立ち、押入れに頭を突っ込んだ。奥の方で眠っていたそれを引っ張り出して指先でほこりを拭う。ハアと息を吹きかけて着物の裾でレンズを磨いた。

それは、父親から随分昔に譲り受けた双眼鏡だ。両の目にあてて窓の外を眺める。まだ使えそうだ。一緒に見つけた麦藁帽子も取り出し、それを被って双眼鏡を首から下げてみた。夏休みが何より待ち遠しかった少年の成れの果て。窓ガラスに映る姿に苦笑した。

双眼鏡と麦藁帽子を押入れに戻そうとした時、部屋のふすまがノックされた。

「ちょっと待て」

言うと同時にふすまが開かれた。そして、女房は俺が手にしたものを見るなり、口元を緩めた。

「あまりその気でなかったら止めにしようかと思いましたが、そうでもなさそうですね」

俺は無言で両手にしていたものを押し入れへ放り込んだ。

「あら、そんなことなさらずに」

女房は小走りに歩み寄ると、押入から麦藁帽子を取り出して頭の上に乗せた。

「あなたが要らないのなら、私がかぶります」

「好きにすればいい」

女房から目を逸らせば、コンピューター画面にコアラが映し出されていた。見れば見るほどよく似ている。俺は女房に向き直った。

「明日はコアラの動物園に行くことにした」翌朝、俺は窓を眺めてため息をついた。雨天ではないにしろ、決していい天気とはいえなかった。下駄でも放って占っているか。まったく天気予報というものはあてにならない。

女房は鼻歌交じりに弁当をこしらえている。今更、中止にするとは言えまい。たっぶりのミルクと砂糖を混ぜた珈琲を水筒に注ぎ、弁当を鞆に詰めると準備は整った。

雨が降っていなければ傘は持たない。用心深い女房が傘を持ち、俺は水筒と鞆を抱え、家を出た。

京王線・高尾山口行き。このまま高尾山まで行ってしまっても悪くない。しかし、今日は女房の好きなようにすると決めたのだ。高幡不動で下車し、動物公園行きの専用車両に乗り換えた。

盆休みは明けたというのに、小さなホームには我々と同じような格好の人々が多く見受けられた。学生諸君にとってはまだまだ夏休みなのだ。

やがて動物公園行きの列車が現れた。その外装にはゾウやらキリンやらの絵が描かれて

おり、なんとも子供じみた車両だ。ホームを見渡せば、青っ涙をたらした子連れや、若いカップルばかりではないか。俺は場違いなところに向かっているのではないかという不安を覚えた。

「まあ、かわいい」

女房はその列車がお気に召したようだ。列車は緑一面の山際をすり抜け、あっという間に人気のない停車場へ滑り込んでいった。

我先と飛び出す子供たちを見送り、シートから腰を上げた。動物公園を目の前にすると大きなゾウの像が待ち構えていた。ゾウのゾウ。厄介な代物だ。

料金を払って門をくぐると、女房は真っ先にコアラが見たいと言い出した。

「せっかくだから、疲れてしまう前に見ておくほうがいいだろう」

「コアラに期待しながら、他の動物たちを見るのも失礼ですし」

なるほど。それも道理だ。俺たちはまずコアラのもとへ足を運ぶことにした。途中、ちょっとした発見があった。随分五月蠅い子供たちがいるものだと顔を顰めれば、その声の主はヤギを眺める子供ではなく、ヤギそのものであったのだ。そこで、ごく当たり前のことにひどく納得させられた。ヤギは「メエ」と鳴くのだ。それは実に見事に「メエ」で、カタカナで書けば「メエ」、平仮名で書けば「めえ」としか表記しようのないほどの鳴き声だった。

動物公園は広大なうえ起伏が激しい。また、コアラともなれば公園の上座と言うべき一番奥まったところにいるようだ。やっとの思いでそれらしき所にたどり着くと、もう休憩にしたい気分だった。しかし、女房の生き活きとした表情を見せられると、そうとも言い出せない。俺は辺りを見回す。案内板によると確かにここなのだがコアラの檻が見当たらない。

「あちらのようですね」

女房の向かった先にはコンクリート作りの建造物。さすがは公園の主役だけあって檻の中で野ざらしにされている訳ではないようだ。警備員までもが立てられたその施設には、何やら物々しい雰囲気が漂っている。

女房は躊躇なくその内へ踏み込んで行った。しかし、直ぐにご対面とはいかない。はじめの部屋にはコアラの生態に関する展示があり、事前に彼らに関する予備知識を身につけなくてはならないようだ。気持ちよさそうに居眠りをするコアラの写真には注釈がされている。その一文を読んで俺は啞然とした。一日に二〇時間は寝ているのだという。この後の面会で彼らは起きているのだろうか。

不安を胸に奥の部屋へと進んでいくと、案の定、眠っているようだ。一匹目の彼は本当にコアラなのかと疑うほど、ただの毛玉と化していた。二匹目はかろうじて耳が覗ける。三匹目のそれは鼻だろうか。四匹目も同様。こんな調子で終わってしまうのかと半ば諦めていたところ、俺は雄叫びを上げながら目を見開いた。WOWOW。五匹目の彼は活動しているではないか。

背を向けたままであるが、確かに木の葉に手を伸ばし、それを頬張っているようだ。起きていただだけでもよしとすべきか。しかし、せっかくここまで来た女房のために、一目だけでもこちらを向いてくれないだろうか。そんな思いも露知らず、彼は黙々と葉を頬張る。

「かわいい」

藪椿が花を落とすように女房の口元から言葉がこぼれた。慈愛に満ちたその表情に、俺は胸をなでおろした。

コアラに手を振ってその場を後にすると、場面は急展開。ゾウやライオンといった見ごたえのある動物に続いて、昆虫館にたどり着く。ムカデやゴキブリまでも展示されており虫唾が走る。足早にその場を後にすると、女房は「お腹が空いた」と言いだし休憩所にて弁当を広げはじめた。

何も虫だらけの館の脇で飯を食うこともないと思うが、確かに腹が減った。空腹にはかならず、昆虫館に背を向けながら丸テーブルに肩を並べた。

握り飯を二つ平らげたところで、女房は紙コップに珈琲を注いだ。曇り空の下、気持ちがいいとは言えないが、炎天下よりはよかったかもしれない。深緑を揺らす風を吸い込めば、ほのかに獣の臭いが飛び込んでくる。都心の外れにこんなところがあったのだ。

「あと、レッサーパンダは見たいですね」

俺は園内マップを広げて絶句した。昆虫館とは真反対の最果てにあるという。今日の女房は随分と活力にあふれている。俺は重い腰を持ち上げ、食後の腹をゆったりと揺らしながら再び歩きはじめた。

道の途中、俺はレッサーパンダの姿を思い出そうとするが、どうもうまくいかない。脳裏に浮かんでいるのはアライグマのようだ。レッサーパンダは川原でリンゴなど洗わないだろう。洗わないアライグマ。続いてタヌキが連想される。

「レッサーパンダとはタヌキの親戚か？」

「さあ？ パンダの親戚でしょうか」

「すると、クマか？」

混乱した頭のままレッサーパンダに辿り着くと、カメラをかまえた子連れがガラス張りの檻の前を右往左往していた。何をそんなに慌てているのかと覗いてみれば、随分と活発にタヌキ、否、レッサーパンダが駆け回っていた。コアラとは異なる旺盛なサービス精神に思わず見入ってしまう。その上、よくできたぬいぐるみのようだ。

一匹連れて帰りたい。

そんな思いさえこみ上げるほど実に愛くるしい。

しばらくレッサーパンダに見とれていると、弛緩しきった俺の顔を女房が覗き込んでいた。俺は咳き込み顔を修正した。

「そろそろ帰るか」

女房は満足そうに頷いた。

レッサーパンダの檻からはしばらく何もいない遊歩道が続いた。緑に囲まれた緩やかな坂道は我々二人のケモノ道といった風情だ。小雨が振り出し、女房が赤い傘を開く。俺はその傘を手にとり、二人寄り添い歩いた。

「こんなところで、逃げたライオンにでも出くわしたらひとたまりもないな」

「やめてくださいな」

意地の悪い俺は、頬を膨らませて顔をしかめる女房の少女性を楽しんでいる。久々にこうして歩くのも悪くない。先の見えない緩やかなカーブ。もう少し続けばいいと思う。

ズーはいいじゃないか。補足しておく。パンダはネコ目パンダ科、レッサーパンダはネコ目レッサーパンダ科、アライグマはネコ目アライグマ科、タヌキはネコ目イヌ科、クマはネコ目クマ科だそう。ネコ目は食肉目とも呼ばれ裂肉歯（読んで字のごとく肉を裂く歯）を持つものとされている。

パンダとレッサーパンダは完全草食なので安心していただきたい。

奥付

奥付

Puzzle 文集 3

<https://puboo.jp/book/33859>

著者 : puzzle

著者プロフィール : <https://puboo.jp/users/puzzle/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/33859>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33859>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社 : 株式会社 paperboy&co.

Puzzle文集3

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
